

2009年12月16日

国土交通大臣 前原 誠司 様

下川自然を考える会会長 千葉 永二  
サンルダム建設を考える集い代表 渋谷 静男  
名寄サンルダムを考える会代表 竹内 和郎  
サンル川を守る会代表 橋本 泰子  
ネットワーク旭川地球村代表 山城 えり子  
北海道の森と川を語る会代表 小野 有五  
大雪と石狩の自然を守る会代表 寺島 一男  
旭川・森と川ネット21代表 平田 一三  
(社)北海道自然保護協会会長 佐藤 謙

### 北海道天塩川水系サンルダム事業の来年度凍結を強く要望します

ダム問題について精力的に検討されていることに敬意を表します。

貴職は、さる10月9日に、「平成22年度における136の個別のダム事業の進め方に関する基本的な方針については、政府予算案の提出時までには明らかにすることとしている」と述べています。私たちは、サンルダム事業についてダムの必要性に疑問があり、環境対策もきわめて問題と考えています。そこで、開かれた場での再検討が必要とする立場から、来年度予算においても引き続き凍結していただくことを、強く要望します。以下に具体的な問題点を、できるだけ簡潔にのべて、資料は別途郵送させていただきます。

私たちの要望書に関する質問などは、北海道自然保護協会（〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目、加森ビル6F、Tel&FAX：011-251-5465）宛にお願いいたします。

#### サンルダム事業の問題点と私たちの治水案の提案

1. 流域委員会・開発局および魚類専門家会議は、ダムに疑問をもつ団体とはいっさい話し合いをしない。

2006年12月まで20回開催された天塩川流域委員会に、私たちの意見を述べる機会を求めましたが、委員長の裁断で拒否されました。その後、北海道開発局は、ダム推進団体とは会っても、私たちには理由を示すことなく話し合いを拒否し続けました。また、サンルダムにおいて重要なサクラマス保全を検討する魚類専門家会議も、私たちとの話し合いを拒否しました。批判的意見に耳を傾けない事業は進めるべきではありません。

2. サンルダム建設の目的はあいまい・・・1) 地元町長は過疎化が進んでいく中で危機感を覚えて、地域振興のために北海道開発局にダム建設を要望→2) 北海道開発局は、中流域の音威子府の治水のために建設→3) 音威子府目的を、天塩川全体の治水に変更→4) 流域最大の町名寄市を水害から守る：地域振興の要望を受けて計画したため、目的が極めてあいまいに推移した。

3. 戦後最大の洪水の実態

治水の目標としている戦後最大の洪水（S48、S50、S56）では、名寄川の堤防は決壊していな

い。支流の決壊と大部分は内水氾濫であった。その後支流堤防は整備・強化され、残るは問題のある堤防の強化・河川改修と内水氾濫防止のための排水機場の設置であると、考えている。

#### 4 サンルダム建設の費用対効果の疑問

戦後最大の洪水被害額は、現在価格で約 100 億円なのに、同様な戦後最大の洪水が起きたときの被害額を 6,000 億円と見積もるなど、疑問が多い。また、ダム建設によって河川水の流れが不正常になるのに、ダムによる流水の正常機能の維持の便益を 130 億円と見積もることも疑問。

#### 5. 目標流量の水増しの疑問

戦後最大の洪水に対処するとしているが、流量基準点の菅平と名寄川大橋では戦後最大流量を目標流量としているのに対して、サンルダムにかかわる名寄川真勲別の目標流量は戦後最大洪水の 1.3 倍としていて、作為的ではないかとの疑問がある。

#### 6. 水道水

下川町は、現在の水利権は 1950 トン/日、現在の最大取水量は 1580 トン/日で 370 トン/日余剰があるのに、サンルダムから 130 トン/日必要としているのは明らかに無駄遣いである。名寄市は 1510 トン/日を新たな水利権を必要としているが、風連町との合併で一時的に人口が増加しても、将来人口減の見通しで短期間に必要がなくなることが示されていて、また現在でも漏水率を減少させることによって水道水が確保されると試算されている。

#### 7. 流域住民はダムを望んでいない

北海道開発局が、流域住民 5,000 人対象に 1998 年に行ったアンケートでは、天塩川が安全と回答した人は 89%、ダムによる治水を望んだ人は 7%、流域住民は、河川改修などで天塩川は安全だと思っていて、ダムが必要と感じていない。

#### 8. サクラマス保全

サンル川のヤマメ密度(尾数/m<sup>2</sup>)は日本一、サクラマスは北海道の重要資源だが、ダムなどの河川環境の悪化で減少しつつある。流域委員会ではサクラマス保全が重要という認識であった。サンルダムのような大型ダムに魚道を作って成功した例はまだない。流域委員会意見では、試験して検討すると述べているが、開発局は、まずダムを建設してから魚道の効果を検証するとしている。これはまずダムありきであり、サクラマスが保全されなければ無駄なダムが残ることになる。私たちは、まずダム建設ではなく、魚道の効果を検証して、その結果に基づきダム建設の是非を検討すべきと主張している。

#### 9. カワシンジュガイとコガタカワシンジュガイ(絶滅危惧種)の保全

サンル川はこれらの貴重な貝類が豊富であるが、幼生がサクラマスの鰓に寄生して育つため、ダムによってサクラマスが保全されなくなると絶滅する危険性が高い。

#### 10. サンルダムに代わる治水案の提案

堤防整備、河川改修および内水対策で十分であることを資料に詳細に述べているので、参照していただきたい。

#### 別途郵送資料

資料：サンルダム建設をめぐる住民と開発局(サンルダム建設を考える集い・下川自然を考える会 宮田修著, 14ページ)

参考資料：冊子「サンルダムは本当に必要なのか？」118ページ

参考資料；リーフレット「サンルダムへの疑問」12ページ，図：堤防高と目標流量(1枚)

2009年12月16日

国土交通大臣 前原 誠司 様

下川自然を考える会会長 千葉 永二  
サンルダム建設を考える集い代表 渋谷 静男  
名寄サンルダムを考える会代表 竹内 和郎  
サンル川を守る会代表 橋本 泰子  
ネットワーク旭川地球村代表 山城 えり子  
北海道の森と川を語る会代表 小野 有五  
大雪と石狩の自然を守る会代表 寺島 一男  
旭川・森と川ネット21代表 平田 一三  
(社)北海道自然保護協会会長 佐藤 謙

サンルダム問題で、別紙要望書を12月16日FAXいたしました。この要望書に関する資料および参考資料を同封させていただきます。大変ご多忙とは存じますが、お目を通していただければ幸いです。

事務局を担当している北海道自然保護協会副会長佐々木克之です。不明な点がございましたら、北海道自然保護協会 電話&FAX：011-251-5465 までご照会いただければ幸いです。よろしく願いいたします。

別途郵送資料

資料：サンルダム建設をめぐる住民と開発局（サンルダム建設を考える集い・下川自然を考える会 宮田修著，14ページ）

参考資料：冊子「サンルダムは本当に必要なのか？」118ページ

参考資料；リーフレット「サンルダムへの疑問」12ページ，

参考資料：図「堤防高と目標流量（1枚）」

## サンルダム建設をめぐる 住民と開発局

サンルダム建設を考える集い

下川自然を考える会 宮田 修

(環境省環境カウンセラー登録番号 1996201012)

はじめに

国民は多くの不満と期待から、政権交代を実現した。政権与党になった民主党は、マニフェストをどのように実現するのか。官に頼らない政策と共に、分かりやすいムダのない国民のための行政を推進していただきたいものだ。

その中で注目される、ダム建設の凍結・中止の話題ではハツ場ダム・川辺川ダムなどと共に、道内にもサンルダム・平取ダムなどがある。ここでは日本で第4位の最北の長流「天塩川」と、その水系で開発局が強引に進め、建設目的の乏しいサンルダムについて説明させていただく。なぜここまで進んだのか、流域住民が望む治水対策は何か、ダムによらない治水対策などについて順次述べる。反省できない開発局に新たな仕事はさせないことが必要だ。

また、これらの疑問を具体的に指摘するとともに、奇跡的に残された豊かなサンル川流域を、シンボルであるサクラマスを通じ保護の必要性と問題点を提起させていただきたい。

### 1 サンルダム建設の経過

サンル川は、天塩川(256Km)の支流名寄川のさらに支川になる。昭和30年はじめの水害は全道的な大被害となり、治水対策の大幅な見直しと対応が急がれた。このころ始めて天塩川上流と名寄川上流部でのダム建設の要望が出ている。しかし、昭和30年代から40年代にかけて急速な治水対策が堤防の建設を中心に行われ、昭和50年代、さらに現在まで河川改修が行われている。昭和40年代に天塩川本流に地元朝日町や周辺市町の、過剰な地域振興に期待した岩尾内ダムが完成(昭和46)。しかし、地域振興とは程遠い結果に終わっている。

サンルダムは名寄川上流ダムとして計画(昭和41)され、サンル地区調査(昭和43)。地盤が悪く名寄川上流へ調査地点が変更になった。その後、名寄川の堤防整備・河川改修が進みダム建設は沈んでいた。

昭和50年代に、下川町は大きな過疎の不安に直面する。JR名寄本線の廃止・町内に二つの営林署の統廃合・三菱銅山の休山であり、町理事者と議会は「両輪と称し」地域振興対策として、過去に沈んだ大型公共事業のダム建設を浮上させるため国に陳情を繰り返した。当時開発庁北海道開発局は大きな公共事業継続を図り、予算獲得を繰り返す。膨れ上がった開発局を支えるため、さらに大型公共事業を続ける必要があったと推測する。そこに、地元地域振興のための陳情が一致したのだろう。サンルダム調査そして事業実施と進み、今年度本体着工へと進む予定だった。しかし、民主党政権により、今年度凍結から中止となっている。

「来年度予算で復活させてはならない。」と願いつつ説明する。

## 2 建設目的の不思議 「ダムを造ること」が開発局の目的

「サンルダムは、天塩川下流の音威子府村の洪水対策のため必要なんです。このことがなかったら、サンルダムは必要ありません。音威子府村を救うため、上流の下川町さんには犠牲になってもらうものです。そのことに下川町さんは同意したんです。」さらにこの時、「下川町さん、ダムで観光や地域振興だけは考えないでください。全国で成功例はありません。」と、何度も言われている。

これは、サンルダム建設目的を確認するため、東京の当時開発庁を訪れた時の説明である。私たちは過去の音威子府村の水害を開発局の資料(水害の航空写真など)をもとに分析し現地村長に建設理由を確認した。「そんな理由は知らなかった。」と言う。過去水害にあった村民に聞いても、サンルダムが音威子府のためのダムだとは知らなかった。実は私たちの調査の結果、音威子府村の水害の直接の原因は、天塩川ではなかったのである。支流の氾濫や低い場所に水が溜まる内水氾濫などであり、サンルダムを建設しても解決できない。そこで、開発局・サンルダム関係者などを現地連れて行き、「音威子府村の水害はサンルダムでは解決できなく、その解決は別の治水対策でなければならない。」と説明。開発局はすんなり認めたのである。これでサンルダム建設の理由はなくなった。・・・と思ったら、「サンルダムにより、下流全体の水位低減効果がある。」と言い出した。開発局にその効果を天塩川流域で過去100年に一度と言われる昭和56年8月水位で試算し、ダム予定地下流の各水位観測所でのダム効果を出してもらった。サンルダム予定地から10数Km下流の流域最大の人口名寄市街地上流真勲別観測所で数10Cmの水位低減効果であり、それは河川敷までも水位の上昇しない河道でのこと。天塩川下流部菅平観測所では数Cmから10Cm以内の効果である。サンルダム効果はその程度のものであった。開発局自らの試算で、再度建設目的が薄れた。

その後開発局が言い出したのは「流域最大の都市、人口と資産が密集する名寄市を守るため。」である。はたしてそうなのだろうか？

## 3 サンルダム建設の費用対効果

平成19年10月に策定された「天塩川水系河川整備計画」は、戦後最大の既往洪水の被害軽減が目的となった。整備計画は開発局が原案をつくり、開発局自らが策定した「自作自演」のものだ。

サンルダム建設の費用対効果では、サンルダムによる被害低減額/サンルダム建設費=1.6〔サンルダムの費用対効果は、当初2.26であった。その後1.73→1.60になっている。〕開発局はダムがあれば、ダムがないよりも1.6倍の被害を減らす効果がある。とした。しかし、大きな疑問が出た。開発局に資料の開示請求をして、その資料から分かったサンルダム建設へと誘導するための手法とは・・・。

〔サンルダムから下流名寄川为天塩川合流部まで〕

- ① 名寄川の堤防のうち、最も大きな被害の出る位置の堤防を机上で切って、名寄市街地で空論の被害(約市街地の1/2水没)額を算出。名寄市と周辺で約4200億円の被害額を想定していた。サンルダム効果でそのほとんどを防ぐという。開発局により空論の演出のため机上で切られた堤防は完成堤防(完成断面)で、天塩川流域で最も治水基準の高い場所であった。さらに開発局は、この名寄市内の空論の大被害図と、サンルダムによる被害軽減予測図を市民説明会で資料として配布。「市民の不安をあまり、サンルダムの過剰な空論の効果を、現実的に表現しダム建設推進に誘導している。
- 「サンルダムは100年に一度の水害から下流を守る。」とされているが、ダムの法定耐用年数は80年だ。記録にある過去最大の流量は、名寄川では昭和48年に経験している、昭和50年、昭和56年も「堤防の越水や破堤はなかった」と、参議院からの質問趣意書で開発局が答えている。

〔名寄川为天塩川合流部から天塩川河口〕

- ② さらに下流町村の被害額算出も、同じ手法で行われた。空論の大被害で過剰な農業漁業被害など約1800億円を算出し、総額約6000億円の被害が生じると述べている。
- ③ また、この中で農業被害の算出では、被害額の算出に本州基準が使われた可能性がある。被害作物に陸稲・サツマイモ・落花生などが出てくるのだ。流域の農作物の状況は、水稻の北限が美深町あたり。それより北(天塩川下流)は酪農地帯で飼料作物が中心である。

- ◎ このように開発局は空論の非現実的な手法で被害額を過大にし、サンルダム建設の費用対効果を有利に算出するため、現実にそぐわない手法を用いたのは明らかだった。また、算定に用いた資料は最新のものではなく、国勢調査などなど一世代前の人口・世帯数・資産の状況であり、そのことでも費用対効果を開発局は有利に算出している。大きな問題は、そのような手法が堂々と開発局や国土交通省にあり、全国どこでも利用されているのではないかということ。

私たち住民は開発局に騙され、裏切られ、威され、それを疑うことの無い町長・市長・業界・市民から嫌われ厄介者として扱われてきた面がある。

私たちが開発局に対し少しでも有利になると、開発局は不十分な対応しかしない。質問に対する回答は、「逃げ」。そして、話し合いには「一切応じない」。サンルダム建設は、流域最大の都市「名寄市を守るため」は、空論で組み立てた、開発局による「でっち上げと脅しによる、サンルダム建設への誘導」だった。

#### 4 名寄川の目標流量の水増し

名寄川の堤防は戦後最大(100年に一度クラス)の流量が流れても、一部無堤の場所などを除き、堤防の越水・破堤はない。すなわち、ダムを造らなくてもほぼ安全な治水整備ができていることを、現実を示している。

一昨年策定された「天塩川水系河川整備計画」での目標流量とは戦後最大の既存流量であり、名寄川では、昭和48年8月真敷別観測所で記録した1,115t/secである。この水量ではサンルダムは必要ない。したがって開発局は名寄川流域にだけ集中豪雨があるとの推測で、真敷別観測所で400t/secも多い、1,500t/sec流れるとした。そして、この流量が流れるから「サンルダムによる調節が必要」としている。

ちなみに、名寄大橋観測所及び下流菅平観測所の目標流量は、現実にあった過去最大流量(昭和56年)とほぼ変わらない。開発局が示す名寄川の目標流量は、サンルダム建設をより正当化するための、現実を逸脱した空論と言える。

天塩川流域委員会においてこの「目標流量が1,200t/secとしたらサンルダムは必要ない。」(北るもい漁協蝦名委員)の発言に、異論を唱える委員は誰一人としていなかった。

#### 5 サンルダムの効果はどうなるか

サンルダム建設は100年に一度の洪水から下流地域の生命・財産を守るため造ると言う。すでに、名寄川の最大流量(昭和48年8月)、天塩川の最大流量(昭和56年8月)が、100年に一度の大水であり経験上すでに大きな被害が出ない状況になっている。サンルダムはこの100年に一度以下のときは無用である。効果が発揮されるのは100年に一度とされている。では、100年に一度を超える出水のときはどうなのか。サンルダムの下流への水位低減効果は失われてしまう。すなわち、ダム効果は期待できず、ダム湖上流からの増水流入量がダム効果なく、堤体上部の洪水吐きゲート(一定のダム湖水位の上昇があれば、調節効果なく、下流に流すための穴)から調節されない水が単に流れ出るのである。下流に対する水位低減効果が失われる。

恐ろしいのは、その洪水吐きゲートに流木が詰まり、さらにダム湖の水位が上昇した時である。最悪「ダム決壊」になり、下流地域の壊滅的被害が考えられる。サンルダムは自然調節式ダムである。

このように、サンルダム建設目的は「開発局が住民をダム建設へと誘導するためのデッチアゲ」と言われてもしかたあるまい。ダムを建設することだけが目的なのである。

#### 6 天塩川流域全世帯への「河川整備についての流域住民の意識調査」(開発局実施・発表)

1998年、開発局は天塩川流域全世帯へのアンケートを実施し、2000年1月に公表した。この調査の時点では、すでにサンルダム建設目的の現地調査が開始されていて、サンルダム建設に同意した流域市町村や、天塩川治水促進期成会(流域自治体の長で組織)関係者

はじめ、流域の建設業関係者の結束した意思も反映されているものとする。

その結果

■ 洪水・土砂災害に対する安全性

- ・安全だと思う 55%    ・ある程度安全だと思う 34%  
・ある程度危険だと思う 8%    ・危険だと思う 2%    ・不明 1%

■ 洪水対策として具体的に進めてほしいこと

- ・河岸保護工を進めてほしい 37%    ・堤防の完成を進めてほしい 25%  
・内水対策を進めてほしい 16%    ・河道の掘削を進めてほしい 15%  
・ダムの整備を進めてほしい 7%

この結果から、サンルダム建設を進める開発局や、流域自治体首長・天塩川治水促進期成会と住民意識に大きな乖離があることが分かる。住民の89%が現在の治水対策による安全性に満足しているし、今後の対策として住民は、ダム建設よりもその場その場に適した対策を求めているのが分かる。水害の原因は様々であり、対策も違う。これこそ、ダムより優先されるべき必要な治水対策ではないのか。

地元河川の現状について住民を交えきちんと確認し、必要なら開発局に説明させ、最良の対策をみなで考える。そして、地元業者による工事として発注し、住民の安心と安全を住民自ら確保する。まさに、地方分権・住民自治は身近なこのような事例の積み重ねから生まれるのではないだろうか。このことが「ダムによらない治水対策の代案」となるべきなのである。

## 7 サンル川とサクラマス

サクラマスは春サクラの咲くころ海から河川に遡上してくるから、その名が付いたとされているが、学名もチェリーサーモンであり、日本固有の魚との印象が強い。世界での分布は極東アジアのみであり、国内では日本海側とくに北海道での資源が多い。サケ科の中で最も美味なものの代表は、このサクラマスとベニサケである。富山名物の駅弁「マスのすし」の原料のほとんどが、北海道からのサクラマスだ。

サクラマスの幼魚はヤマベ（ヤマメ）である。その魚体の美しさから多くの釣りファンが河川上流部までわけ入る。サンル川は「ヤマベ湧く川」としてよく知られ、地元には毎年10,000尾以上釣る女性もいるほどだ。全道のサクラマス保護河川を含めても、ヤマベの密度から、他に例がないのではないかと言う研究者もいる。サンル川とその流域の現状から推察してみよう。



## 8 北海道のサクラマス現状

北海道のサクラマスは放流事業を行ってきたが、サケのように人工繁殖による放流では、資源増加をもたらさなかった。サクラマス資源の減少は、1960年代以降に急ピッチで建設が進められた治山・砂防ダム建設や河川改修により産卵環境が次々と奪われたことが原因として推察できる。降海型サクラマスはシロサケ稚魚よりも1年多く川で暮らす。河川残留型サクラマスは一生を川で暮らす。このことから、サクラマスの保全には自然河川が何より必要なのである。

## 9 サンル川のサクラマスは増えてきた？

天塩川の支流名寄川。そしてサンルダム建設問題で揺れるサンル川はその支川で約30Kmある。天塩町の河口から産卵のため遡上するサクラマスはサンル川上流部まで約200Kmもめざすものがある。これはサクラマスの遡上では国内最長となる。サクラマスがなぜこれほど多いのか、その理由のいくつかを推測した。

- 1) 自然河川がほとんどで、蛇行と瀬・淵・平瀬が続き河畔林が豊富。河床は岩盤が多く、多種の礫が堆積して透水性と保水性が良く、産卵・生息適地が多い。釣り人から「雨が降っても濁らない川」としても知られている。
- 2) 天塩川河口からサンル川まで、遡上を障害する河川横断工作物は2ヶ所の高低差の少ない堰で、魚道もある。サンル川には多くの支川があるが、遡上できない砂防ダムは1箇所のみであり奇跡的なことと言える。
- 3) 過去伐採された国有林や山火事により奪われたサンルの森が復活再生してきた。そのため夏季の水量も安定している。
- 4) ダム湖として水没予定地となった農地は国によって買収され、ダム堤体予定地から上流の居住者はゼロになった。農薬・化学肥料・家畜のし尿がサンル川に流入しなくなった。ヘイケボタルも増えている。
- 5) 買収された農地は放置され、周辺森林の力で「森が復活再生」し、農業水路など浄化が進んできた。
- 6) 水温が低く、サクラマスが生息しやすい。
- 7) 水生昆虫の種類が多く、その量も豊富。

これらから、サンル川のサクラマス（ヤマベ）資源は、国内でも増加しているという稀な川である。天塩川は日本海、言い換えれば世界のサクラマス資源維持に大きな役割を果たしているが、その中で、サンル川の果たす役割は非常に大きい。

## 10 サンルダム建設でサクラマスはどうか

サンルダム建設によるダム上流のサクラマスは、絶滅へと向かう可能性が非常に高い。開発局の造った、道内2つの既存ダムの現状は

### ① 二風谷ダムと魚道(沙流川)

年平均のサクラマスの魚道遡上数は6尾程度。産卵から1年半後には幼魚(スモルト)が海へ降河するが、魚道を下るものは1%でしかない。ほとんどが発電タービンに巻き込まれたり、放水ゲートから落下させられる。年間10,000尾の放流を続けているが、ダム上流のサクラマス資源は減少し続け回復しない。

### ② 美利河ダムと魚道(後志利別川)

2.4Kmの長い魚道で、魚道効果はほとんどない。多くの標識したヤマベを放流しているが、回帰した標識魚の調査もしていないと言う。サクラマスの遡上はほとんどできない。ダム上流サクラマスは絶滅へと進むだろう。サンルダム魚道はこの魚道の形式と類似する。

### ◎ サンルダムと魚道

驚くべき100段の段差と、その距離9Kmは日本一と言う。しかし開発局の造るダム魚道では効果ある実績は未だにないのが現状。サンルダム建設と魚道を検討する以前に、開発局が早急になすべきことは、上記二つのダム魚道を改善し、十分な成果を上げることではないか。それなしで、日本一の魚道造りは「国費8億円のムダ使い」になる。昨年と今年わずか20m7段の試験魚道で調査が行われた。目的は「遡上してきたサクラマスをうまく魚道へ誘導できるか」である。しかし、魚道を嫌ったサクラマスの多くが遡上をあきらめ、魚道下流で産卵している。開発局の魚道はこの程度のものなのだ。

開発局は、この魚道の費用対効果をどのように説明できるのであろうか。

## 11 カワシンジュガイ(絶滅危惧種)を守れ

サンル川には上流部から下流部まで、カワシンジュガイが生息している。カワシンジュガイの繁殖にはヤマベが関与している。この貝は子孫の維持増殖のため、水中で微細な幼生を噴出す。そのままと流され貝として生き残れない。ところが、サンル川ではカワシンジュガイあるところ、ヤマベがいる。噴出した貝の幼生はヤマベのエラにきれいに付着し成長する。ヤマベは移動するので、運動能力のないカワシンジュガイの移動と、新たな繁殖場はヤマベ任せとなる。微小な稚貝に成長し、エラから脱落し河床で成長する。どの魚種でもよいのではない。カワシンジュガイはヤマベに、コガタカワシンジュガイはイワナやアメマスが繁殖の決め手となる。ダムや不十分な魚道によってサクラマスやアメマスなどが遡上できなくなると、その上流のカワシンジュガイやコガタカワシンジュガイは100歳近くまで生き老いて死ぬ。全てが老いて死ぬ。絶滅するということだ。

## まとめ

サンルダムは治水・水道水の確保・発電・流水の正常な機能維持の多目的ダムである。これらの4つの目的全てが不十分なまま、今日に至る。これほど建設理由のないダム建設が国である国土交通省や開発局がすすめる、流域市町村長・知事が認めているのだが、住民の意見との差が露呈する。ダム建設が進んだのは地域活性化のために、各自治体が望み続けた「公共事業と依存体質」にあるのではないか。大きな公共事業を求めることは、事業者である国に従順になることでもある。

サンルダムは治水ダムとして計画された。しかし多目的ダムにすることで、ダムは大型化し建設費も膨らむ。これにより開発局の仕事がより大きく確保され、建設地周辺自治体は地元での物資の調達、業界への工事の発注の期待がさらに膨らむ。

「水道水の確保」は、下川町と名寄市が、より大型の多目的ダムを求めたことに対する開発局からの要求だったと推測される。地方自治体の将来設計と着実な前進は、必要のない「水道水の確保」で揺れているのが現状だ。

◎下川町は人口減少中 水道水の新たな確保は必要ない。

下川町のサンル川からの水利権(取水権)は 1950t/日 (22.6L/秒)  
一日取水量で多かった日 1580t/日 (18.3L/秒)  
余っている量 370t/日 ( 4.3L/秒)  
新たなダムによる取水 130t/日 ( 1.5L/秒)

名寄市の水道事業とダムによる 17.5L/秒の取水の必要性は？

名寄サンルダムを考える会 竹内和郎代表の説明をいただく。

いまだ下流市町村から、「自分たちの町の水害を具体的に示し、サンルダムでなければ解決できない。下川町さんには、大きな負担をおかけするが是非とも協力してほしい。」と言われたことがない。

地元名寄市長・下川町長と開発局の関係。天塩川治水促進期成会の本来果たすべき役割についての疑問も浮上する。開発局はじめ、名寄市長も下川町長も住民に対するインフォームドコンセント(説明と同意)が不足していた。両首長は、ここまで進めてきた責任を、住民から問われ続けなければならないだろう。

サンルダム建設は開発局の生き残り対策と、下川町・名寄市などが微々たる地域振興を期待してのもの。

これほどムダなダム建設のため、世界に誇るべき豊かで再び造れない環境を失えない。ダムによらない治水とともに、次世代に受け継ぐべき貴重な財産となりうるサンルの環境を残すため、皆さんの支援をお願いする。

## サンルダムに代わる治水(案)

### 流域住民が望む治水対策は

開発局が1998年実施した天塩川流域全世帯への「河川整備についての流域住民の意識調査」を前述した。

89%が「洪水・土砂災害の安全性」について満足しているものの、10%が十分ではないと回答している。各建設業界・地元商工団体等の意見の統一や、ダムを求める流域自治体の作画的回答も含まれていることは承知する。しかし、「十分ではない」と答えた10%の中にわずかでも水害の危険性を感じている住民がいれば、対策は必要である。

その具体的表れは、次の設問にある。つまり「洪水対策として具体的に進めてほしいこと」の内訳である。河岸保護工37%、堤防の完成25%、内水対策16%、河道掘削15%残り7%がダム建設だった。

私たちはこれまで過去の天塩川及び名寄川の水害について、開発局の資料を調べ現地住民からの聞き取りや、調査を行ってきた。その結果、開発局が水害の原因をきちんと調べてなく、対策されなかった水害を指摘し、改善していただいた事例もある。(音威子府村、対応名寄河川事務所)

また、これまでにどのような対策が行われたのかも主要箇所を確認している。平成18年10月にはこの地方を爆弾低気圧が襲い、名寄川では戦後最大流量だった昭和48年8月に迫る流量を記録した。今後の治水対策上大変に有意義な事例となった。

水害には原因があって、その原因は様々である。また、複数の要因が重なる場合もある。要するに、原因に対する細かな治水対策が、本来進められるべきであり、アンケートで住民が答えた内容がそのことを表している。

### サンルダム建設予定地から下流の治水対策

#### 1. 下川町北町の内水氾濫と対応

この地点はサンルダム建設予定地下流右岸で農地であるが、無耕作地が多い。営農者は高齢化していて、十分な営農活動ができない。過去10年に2度の内水氾濫があった。

最初の氾濫は、降雨によるサンル川の水位が上昇、2箇所の樋門を閉じる操作を現地委託者が行ったが、長期間使用しなかったため動かなかった。そのため水位の上昇したサンル川の水が農地に逆流した。翌年樋門を改善した。

2度目は平成18年10月で、サンル川及び名寄川流域に戦後2番目を推測する降雨・流量があり、樋門を閉じたためサンル川への排水が断たれ水が溢れ内水氾濫となった。こ

の被害を大きくした要因に、ダム建設のための付け替え道路(道々)からの多量の排水流入が認められた。

対策：①樋門管理者は高齢であり、今後の管理に不安がある。管理者の変更を考慮する。  
②付け替え道路は幅が広く広大なのり面があり、排水路への流入量が増大している。  
排水路は下流名寄川へのルート変更をすべき。

## 2.下川町内名寄川矢文橋下流右岸の外水氾濫

矢文橋から右岸下流は山付きになるまで無堤であり、町道と農地の一部が外水被害を受けた。

対策：山付きになるまで築堤する。

## 3.下川町⇄名寄市境界付近名寄川右岸(上名寄堰堤から下流)

上名寄堰堤右岸では水稻栽培が行われ、納屋がある。この地点を含め下流右岸は無堤となり山付き後さらに名寄市側に無堤が続く。

対策：下川町側は山付きまで築堤する。名寄市側は山付きから下流は荒地であり、民地であれば河川用地とし取得。築堤は必要ない。農業排水路に樋門必要。

## 4.名寄市中名寄7線橋上流右岸

山付きに近い状態で、荒地と一部林地があり市道がある。

対策：外水氾濫は荒地であり、民地であれば、河川用地として取得すべき。築堤の必要はない。

## 5.真熟別堰堤下流湾曲部

河道のわずかな狭窄がある。

対策：湾曲部の河道拡幅と右岸の護岸をする。

## 6.名寄市旭東右岸

農地所有者と開発局が堤防用地について紛争中。結果無堤のまま。

対策：この農地所有者の一部水田が外水による被害を受ける可能性が高い。早期の決着により築堤されるべき。

## 7.その他名寄川の被害と対策

### 1) 下川町三の橋堰堤右岸

平成18年10月低気圧による降雨と増水により、堰堤が水没して水位がせり上げられ外水氾濫となる。緊急出動により土嚢を設置して民家の床下浸水でくい止める。しかし右岸下流側農地が浸水被害を受ける。

対策：名寄川はこの被害地点より上流は無堤が続く。築堤を急ぐ必要がある。この被害箇所は今回の「天塩川水系河川整備計画」での対象となっていないため、参議院から早期改善のため質問趣意書を再三提出したが、開発局は対応しようとしなない。サンル川合流地点より上流に位置するため、サンルダムによる改善もできない。

## 2) サンル川合流地点から下流、名寄川の天塩川合流地点までの内水氾濫と対策

(平成 18 年 8 月の事例)

### ① 下川町上名寄矢文橋左岸農地

この地点は堤防縁で、湿地帯を埋め立て農地としている。そのことは農家も承知している。あくまでも農家が被害を強調するのなら、このような場所の農地転用を認められた側の責任もあるだろう。被害は少なく、対策は今後の課題である。

### ② 名寄市中名寄左岸農地 1

支川が名寄川と合流する位置で、広い湿地帯であったが水田に転用している。一部はまだ湿地となり樹木がある。農地転用に問題はあるが、小型排水機場の設置が考えられる。

### ③ 名寄市中名寄左岸農地 2

最もこの地域の水田耕作地の下手にあたる。これまでも内水被害があり、対策として、小型排水機場が必要。

### ④ 名寄市真蕨別地区右岸農地

名寄川堤防に隣接する農地。低いので内水被害となる。対策としては、被害面積が小さいため、今後の経過で対策の判断をすべき。

### ⑤ 名寄市旭東地区右岸農地

名寄川堤防に隣接する農地。低いので内水被害となる。対策としては、小面積であるため、今後の経過をみる。

### ⑥ 名寄市日進右岸農地

名寄川が天塩川に合流する手前。旧川もあり低い地形になる。被害は小面積であり、今後の経過をみる。

## 天塩川の流下能力(開発局資料)と治水 別紙

天塩川本流のうち、名寄市から上流土別市さらに岩尾内ダム間の河道は、岩尾内ダム建設と堤防整備により、整備目標流量が安全に流れる河道が確保されている。

さらに、名寄市から上流下川町市街地間は天塩川流域において最も重点的に整備された所である。

問題は KP150(名寄市下流)から、下流 KPO(天塩川河口)間の多くの地点で、整備目標流量を流すことができないとされていることだ。約 1/4 の地点ではその目標流量の半量しか流すことができず、極端なところは目標流量の 1/4 以下しか流せないのだから信

じられない。ところがこれまでに大規模で深刻な外水氾濫が頻発していたのでもない。次のことが考えられるが、開発局の説明と私たちの検証が必要だ。

- 1) この流下能力図が正しいと考えると、開発局はこれまでこの区間の治水整備事業の基本を誤ったまま今日に至ったと言える。過去の整備計画の間違いを正す必要がある。
- 2) 開発局の今までの治水整備が、人口密集する名寄市・士別市を中心に進められ、人口の少ない地区は生命・財産の危機があっても後回しにされてきたのではないか。
- 3) この流下能力図は正しいとしたら、外水氾濫による被害面積は大きいが、被害額は少ないため治水対策を後回しにしていた。
- 4) 現状の堤防など整備状況から、このような多くの流下能力不足は考えられない。開発局は正確に再調査して報告すべき。それからでない対策はできない。

#### 効果的で地元業者ができる遊水地の建設

この区間での流下能力不足は、サンルダムができてほとんど効果が無い。したがって別の治水対策となる。ただし、この流下能力図が正しいという前提でのことだ。

- 1) 広大な面積の旧川が多数存在している。この旧川などを遊水地とすることで、流下能力の不足を改善し、旧川水質の改善も期待できる。最大の特徴は、農地を極力使わない配慮が現実に可能ということだ。
- 2) 音威子府村箴島はこれまで何度も内水氾濫になっている。近年では平成 13 年 9 月に 24ha が被害を受けた。このとき名寄市内淵の内水氾濫は 30ha であったが、すでに排水機場が整備された。しかし、箴島への排水機場整備の計画は「整備計画」では見逃されている。参議院からの質問趣意書で再三整備を求めたが開発局は整備しようとしな。排水機場の整備は早急に必要だ。音威子府村の遊水地も効果的である。

詳細は別紙で説明

#### 治水の基本は築堤と堤防の補強で

無堤区間への築堤や堤防の補強は地元業者にもできる。工事により地域の活性化も期待できる。内水対策とともに、優先すべき治水対策だ。

#### ◎フロンティア堤防の復活を

1997 年河川法が改正された翌年、国土交通省は堤防満杯まで水が来ても耐えられ、越水しても急には決壊しない「フロンティア堤防」の設計手引書をつくり、2000 年には一般堤防も満杯まで水が来ても耐えられる構造とするよう設計指針を出している。このような堤防補強が進めば、ダムなしでも治水安全度は格段に高まる。ところが、ダム反対派がこの堤防強化策をダム不要論の根拠にし始めた途端、国土交通省は設計指針を作り直し、満杯まで所定の余裕(通常 1.5m か 2m)を残した水位まで堤防が耐えればよいように強度の基準を引き下げてフロンティア堤防構想も取り消している。フロンティア

堤防を復活させることが、今まさに求められている。

## その他 サンプルダム建設目的など

### 1, 発 電

サンプルダムによる発電は、当初最大 1400KW であったが、ダム利水容量を引き下げ貯水量が減少したため、最大 1000KW となった。これは、風力発電の風車 1 基分にも満たない。自然調節ダムであること。魚道への通水はサクラマスの上流と降下の時期必要であり、5 月から 9 月末日までになる。通水により水位の低下があるため十分な発電は無理であると予測できる。

### 2, 流水の正常な機能維持

①常に一定量の水を下流に流し、②ダム下流の河川環境の保全を言う。①をすれば、洪水時ダムによる貯水容量が増えたとき、どのように対処するのか。また、発電能力は①②をすることにより、さらに低下する。

何よりも、川は春の増水と台風シーズンの増水があり、夏季の減水があってその環境が維持されているものだ。人の都合でコントロールして「流水の正常な機能維持」は異常なことである。

このように、サンプルダム建設の目的は「治水」「水道水の確保」「発電」「流水の正常な機能維持」のどれをとっても、不十分か無い。その反面多額の税金の無駄使いと環境破壊はダムがあり続ける限り続く。

すでにダム建設で失われた多くの北海道の財産もある。環境影響評価ではヤマハナソウ・オクエソサイシン・フクジュソウなどの植物がすでに一部失われた。低地風穴地帯に存在するイソツツジは集落存続の危機である。天然記念物クマゲラはすでに営巣木やねぐら木が失われ、ニホンザリガニやエソサンショウオ・ヒメギフチョウの生息地もつぶされた。つぶす理由は「他にも生息地があるから、影響は少ない。」とされた。

同じような考えでサンプル川を代表する魚類サクラマスが大きな危機を迎えている。開発局は、「天塩川流域のサクラマスの、生息可能な河川の砂防ダムなど横断工作物を改善し、資源を維持するからサンプルダムによるサクラマス資源の減少については大目に見てほしい。」と考えているようだ。これも「サンプル川では減少するが、他の生息地は確保する。」で似たようなものだ。サンプル川のサクラマスやイワナが減少すると、カワシンジュガイ・コガタカワシンジュガイが世代交代できなくなる。すなわち、絶滅へと向かう。

北海道の自然環境は、二度と造れない大きな地域資源として、今後地域振興の主役になるだろう。人工構造物や箱物でなく、本物に触れ感動する時代である。

北るもい漁協蝦名 修専務がテレビで「もうこれ以上の開発はやめてくれ」と言っていた。切実な訴えである。「サンプルダムの魚道が十分機能しない場合はダムの運用を認め



ない。」とも言っている。これからは、国(官僚)任せでなく、自治体行政だけでなく、流域全体の住民による「森や天塩川、海」を共有財産とした発展を望みたい。

この貴重な時間を設定していただいた方々に心より感謝申し上げます。 2009.11.26

この後、1.名寄サンルダムを考える会 竹内和郎代表による「ダムによる新たな水道水の確保と、名寄市の水道事業について」 2.北海道自然保護協会 佐々木克之副会長による「私たちの最近の対応と問題点・サンルダムでの問題点」 北海道の森と川を語る会 小野有五代表による「ダムによらない治水の代案」・「絵本 世界にたったひとつのサンル川」の説明。 出羽 寛 天塩川流域委員会委員による「流域委員会での問題点」について、それぞれ話していただきました。そのあと全体での話し合いでした。

#### その他参加者として

地元 下川自然を考える会 千葉永二会長・早田史朗事務局長、サンルダム建設を考える集い 渋谷静男代表、下川町議会議員 高原 大、橋詰昭一、連合下川 山川美紀委員長、一般町民 南 邦彦

道議会民主党社会資本整備委員会(部会) 滝口信喜委員長、北口雄幸、田村龍治、池本柳次、沖田龍児 民主党北海道総支部連合会 鹿糠浩之

北海道建設部土木局長 田中 実、旭川土木現業所 村口 明所長、事業部 阿部島啓人治水課長 河川課 天井弘志



～天塩川の治水計画とサルダム建設計画の問題点～

# サルダムは本当に必要なのか？





(社)北海道自然保護協会  
下川自然を考える会  
サウルダム建設を考える集い  
名寄サウルダムを考える会

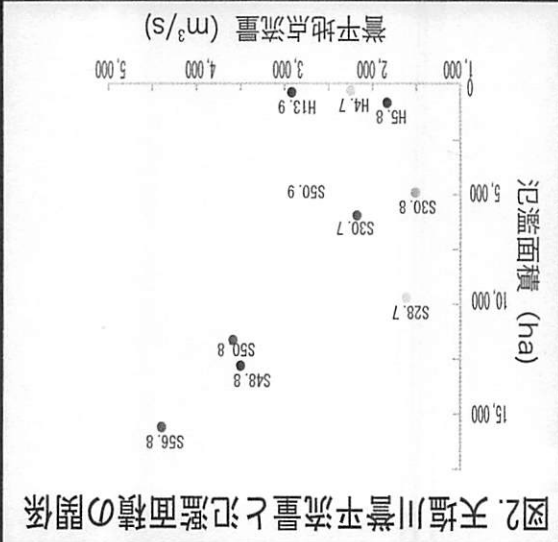


図2.天塩川平均流量と氾濫面積の関係

同じ流量(同じ雨量)でも、平成(下の三つの点)に入ると、昭和に比べて氾濫面積がずっと減少していることがわかります。堤防の強化・河川改修などで氾濫が起きにくくなっているのです。

# サウルダムへの疑問

～住民の意見が反映された天塩川の整備計画作成を！～

流域住民の実感として、図2で示されているように、最近では氾濫が起きにくくなっていて、ダム整備の希望は少なく、堤防の完成など別の対策を希望しています。

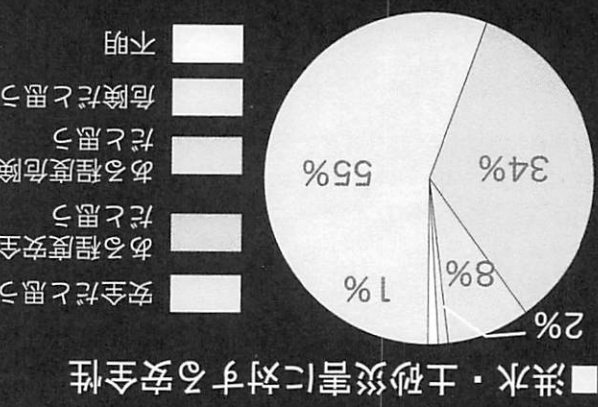
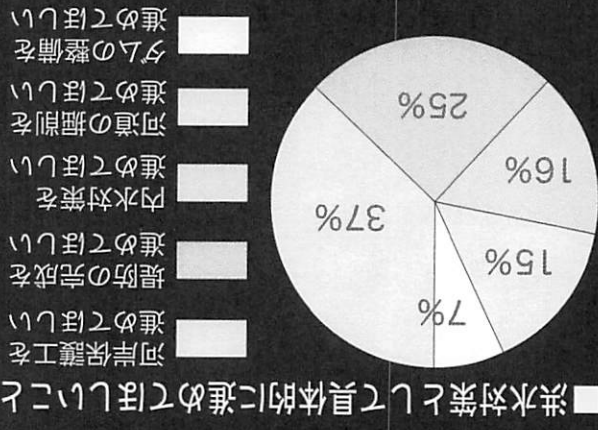


図1.河川整備についての流域住民の意識 (1998年北海道開発局実施アンケート結果)

# 堤防整備、河道拡幅で目標流量が流れても、堤余 裕高はほぼ1.5mを確保できる(国の基準は最低1m)

